

(2) 地域総合研究センターの調査・研究活動内容 (2002.10~2003.9)

今年度の地域総合研究センターの活動実績として、テーマ2.『生活記録による世代間交流事業』とテーマ3.『地域づくり学習会』の実績報告を掲載する。

まず、第1に『生活記録による世代間交流事業』(テーマ2)の世代間交流学習会の中間報告である。私たちの生活の原点である「自給自足の生活」の記憶が消滅しようとしている現実に直面している今、「語り部」が現存しているうちに「自給自足の生活」を洗い出し、検証する必要性を痛感して発足した学習会が世代間交流学習会である。この学習会に先立ち、研究センター(当時は総合研究所)では、昭和10年の「自給自足の生活」を克明に記録した資料を「老人達のおきみやげ」(2001.9)として出版した。この資料は研究センターの研究員である玉井袈裟男氏が昭和51(1979)年に長野県南安曇郡三郷村老人クラブ及木支部の会員と3年7ヶ月の歳月をかけて実施した「生活資料記録運動」の成果である。この本を基に同じ及木支部の老人クラブの会員(当時の「語り部」の子供達-推定年齢70歳-)の協力を得て、「自給自足の生活」の最終ステージともいえる昭和30年代の生活記録運動に着手したのである。

この交流学習会は毎月1回学習会を重ね、継続して着実に実施されており、今年度は失われた伝統行事の復活を試みた。この記録を世代間交流学習の中間報告として掲載する。

次に第2として、『地域づくり学習会』(テーマ3)の報告である。『地域づくり学習会』は「まず、しかるべき先進地での指導的役割を果たしたキーパーソンのお話を聞き、更に後日、現地を見せていただき、感動をもって地域づくりを学ぶ」会である。内容は「講演会+研修ツアー」を組み合わせた本格的な学習会を計画している。さらに、この学習会参加者が地域でキーパーソンとなり、相互支援ができるようなネットワーク作りも視野にいれて活動を続けている。

今回は、第一回の地域づくり学習会が2年(1年目に講演会、2年目に研修ツアー)にわたり実施され、完結した。ここに第一回の『地域づくり学習会』の成果を記載する。

・世代間交流学習の中間報告

1. 長野県南安曇郡三郷村及木集落における世代間交流学習の中間報告
「精霊流し」と「お月見」行事の再現から見えてきたこと

・地域づくり学習会

オープン・カレッジ「人にやる気・村に活気・地域づくり」 講演録

2. 「人にやる気・村に活気・地域づくり」学習会の意義
3. 「人がかわった、地域がかわった～『ひだ清見』の村づくり」

松本大学地域総合研究センター地域づくり学習会・研修旅行

4. 地域づくり研修旅行報告-視察内容と所感-
5. 飛騨・美濃見聞録

長野県南安曇郡三郷村字及木集落における世代間交流学習の中間報告

「精霊流し」と「お月見」行事の再現から見えてきたこと

松本大学地域総合研究センター
研究員 玉井 袈裟男

我々は現在、月1回の割合で、及木（およびき）集落老人クラブ会員と共に、世代間交流学習を継続中である。

その目的は、我が国の自給自足的な、永続可能な生活の最後のステージとみられる昭和30年（1955）を基準年として、どのような生活が営まれていたかを克明に記録しておこうとするものである。

昭和30年（1955）を基準にした理由は次の通りである。

- 1) 稲作農業がほとんど人力と、僅かに畜力利用に依る伝統的技術に依っていた。
- 2) 単純な化学肥料はあったが、主たるものは堆肥、厩肥、緑肥（紫雲英）などであった。『素作り6俵』という言葉がまだ生きていた。
- 3) 農薬も除虫菊や鯨油、石油などが僅かに使用された程度であった。
- 4) また現金収入源として養蚕が一般的に行われていて、屑繭から取った糸で自家製の衣類なども作られていた。
- 5) 石油コンロもまだ入っておらず、燃料はすべて自給されていた。粃殻や粗朶である。
- 6) 化学洗剤もなく、洗髪剤もなかった。トイレットペーパーもなかった。
- 7) 水道が入ったのは昭和31年（1956）以降であり、当時は流水を飲用していた。
もちろん下水道もなかった。
- 8) 人糞尿はまだ肥料としての価値をもっていた。バキュームカーの登場はその後だった。
- 9) ゴミ収集車などというものもなかった。
- 10) 電話もテレビも一般家庭にはなかった。
- 11) 新聞はとっている家が多かったが、広告の折りこみなどというものはなかった。
- 12) 住居は明治、大正以来の伝統的な家屋であり、第一次改造ブームにはまだ間があった。
- 13) 味噌、醤油はすべて自家製であり、化学調味料も一般的ではなかった。
- 14) 人口流出も少なく、過疎という言葉はまだなかった。
- 15) 重層家族であり、三世代同居はあたりまえであった。
- 16) 農地改革からまだ10年を経てはいなかったが、地主、小作関係は殆ど消滅していた。
- 17) 革新政党は依然として『アメリカ帝国主義と日本独占資本の二重の収奪のもとにおかれた農民は、この低米価政策のもとで最早食っていけない、と言っている』と繰り返していたが、一般農民は高額小作料から解放された経済的なゆとりと、自作農になった精神的な喜びに支えられ、それなりに充実した生活を送っていた。
- 18) 高度経済成長政策という名の“上からの近代化”はまだ数年先のことであったが、“下からの近代化”の気運がもり上がりつつあって、自作農民として最も気力が充実した時期であった。

あれからおよそ50年、高度経済成長政策で物は豊かになり、生活は便利になったが、その裏で、人心の荒廃はとどまるところを知らず、生活環境、自然環境の悪化は眼をおおうばかり。

近年しきりに持続可能な農業を、とか生活をということが言われているが、昭和30年（1955）はまさにその生産や生活の最後の時代、いや最後ギリギリの年といってもよかった。

この記録運動には先駆的な実践がある。

昭和51年（1976）から3年7ヶ月に亘って、同じ三郷村及木集落の老人クラブ員24名（平均年齢72.2歳）の協力によって、昭和10年（1935）の生活を記録し、〔老人達のおきみやげ（世代間交流学習の記録）〕として、平成13年（2002）に刊行されている。

今回記録運動に参加している人達はほとんどが前回参加者の子供達で、平均年齢が74歳である。2回とも同じ者は、記録者の玉井だけで、前回51歳であった私は、今回77歳での参加になっている。考えてみれば、親子二代の稀な学習運動ではある。

2回の記録運動の基準にしている昭和10年（1935）と昭和30年（1955）の間隔は20年に過ぎないが、

●この間には第二次大戦があり、日本は敗戦と、戦後の混乱を経験し、

●農村では農地改革が行われ、地主、小作制度が姿を消す。

しかしながら農業生産は依然として稲作中心の自給自足的農業であり、生活様態もほとんど変わっていない。

●国家神道は天皇の人間宣言とともに姿を消すが、氏神を中心とする信仰習俗はそのまま残っていたし、仏教は全くそのままであった。

その生活実態は既刊の『老人達のおきみやげ』と、現在継続中の仮称『老人達のおきみやげpart 2』で明らかにされてゆくであろう。

〔記録時の時代背景〕

さて、“おきみやげ（part 1）”の記録時期は、昭和36年（1961）に始まる高度経済成長政策が頓挫し、低成長に移行した昭和51年（1976）に始められたものであり、高度経済成長期の急速な生産や生活の変化に対して抱いた、農業や農村のかかえる漠然とした危機感・暗い感情が下敷きになっている。

農業基本法下の農政は、国際競争に耐えられる農業、ビタミン農業、蛋白農業などというキャッチフレーズですすめられ、日本農業を急速に変えてしまったが、それは工業化のための土地や水や、人や金の工業部門への移動が根本的な目的であった。それは、食糧自給政策の放棄であり、従って農業の地位の低下は当然のことであり、慢性的な嫁不足、後継者不足は政策の作り出したものであった。農村の過疎化、高齢化も当然といえば当然であった。

さて、今回の仮称“おきみやげ（part 2）”は1980年代のバブル経済、そしてバブルはじけから重苦しい経済の低迷といいながら、物は過度に豊かに、生活は過度に便利に、しかしながら人間関係の稀薄化、生活環境、自然環境の悪化、政財界の腐敗、モラルハザード、青少年犯罪の多発化、凶悪化等々、八方塞がりな平成14年（2002）に始められている。

農業の変化も激しく、『農業もグローバルな視点で・・・』などと、行政や農協の指導者達までもが口にしている。

グローバル化して入ってきたものは、先にはアメリカの小麦、大豆、粉乳、トーマロコシ、今はカリフォルニアの米、中国からの野菜や椎茸、途上国からの果物など。出て行ったものは工業製品だけ。

グローバル化とは、アメリカ的システムの世界化だ、とっているのはフランスの思想家、ジャン・ボードリヤールだ。彼は9：11の事件のあとに出された著書の中で、次のようにいっている。

『グローバル（地球的・世界的）とユニバーサル（普遍的）という用語の間には、人びとを欺く相似性が存在する。普遍的（ユニバーサリティ）とは、人権と自由と教養文化とデモクラシーの普遍性であり、グローバリゼーションとは、技術と市場とツーリズムと情報の世界化である。グローバリゼーションの進行は不可逆的であるように見えるが、普遍性のほうは、むしろ消滅の一途をたどっているらしい。すくなくとも、西欧近代を基準にした価値のシステムとして、他のどんな文化にも先例のないやりかたで構築された普遍性は、姿を消そうとしているかのようだ。

普遍化されたあらゆる文化は、特殊性を失って死滅する。西欧文化が力づくで同化しながら破壊してきたあらゆる文化のことだが、西欧文化自体も、普遍性という思いこみをつうじて、そうなるうとしている。ちがうのは、西欧以外の文化が特殊性ゆえに死滅するのに対して（それならみごとな死だ）、西欧文化はあらゆる特殊性の喪失ゆえに、あらゆる西欧的価値の根絶ゆえに死滅することである（非業の死ではある）。』

『パワー・インフェルノ —— グローバル・パワーとテロリズム』

ジャン・ボードリヤール著、塚原史訳・NTT出版

今回行われた『精霊流し』と『お月見』行事再現の試みは、ニューヨークで起きた9：11事件を繰り返し見せつけられた日本の、安曇野の、稲作農民である老人達と、『パワー・インフェルノ』を読んだ直後の私によって発案、合意されたものである。

我々、というよりは私の心の中には非業の死をとげた数千の人々への鎮魂の気持と共に、かすかながら、そうせざるを得なかったテロリスト達への共感の気持があったことを否定することができない。

“精霊流し”の再現

8月16日、送り盆の日の行事は、昭和10年（1935）も昭和30年（1955）も、ほとんど変りなく行われていた。また、それから半世紀近く経った平成15年（2003）も、精霊流しを除けば、やや簡素化されているとはいえ、ほとんど同じように行われていることが分った。

ところで、8月16日の頃をみるに、『老人達のおきみやげ』には次ぎのように記録している。

〔8月16日〕送り盆 おせえにち

この日は労働はしなかった（どうしても欠かせない蚕、田の水、家畜の飼付けだけは別）。

朝食は普通。

仏様には朝、普通に食膳を上げておいて、朝食の後、早々に次のようなことをした。

9日（新盆の家）か13日に作ってあげておいた里芋の菜（賽の目に切った茄子が入っている）に、更に天ぷらやお団子、その他の上りものを入れて、葉の縁をまとめ、藁で十文字に縛り、それを仏様のお土産として川へ流した。入りきれない時は新しい里芋の葉を取ってきて、三つにも四つにも包みをこしらえて流した。

「仏様が善光寺へ帰るのに間に合わないといけないから、早く流せ」と言って、早いうちに家の前の川に流した。

仏様は善光寺経由で極楽へ帰られると考えていたようで、そこで勢揃いして一緒に帰っていかれるのに、家の仏様だけお土産が到着していないと悪いから、と考えて、荷物をまず先に出しておこうと考えていたようである。近くの大川、犀川は北に流れ、善光寺のある長野市へ向けて流れているのであった。リンゴ、モモ、マクワウリなども流した。西瓜は家で食べてしまうのが普通であった。

川下の子供たちは流れてくるもののうち、うまくて珍しいリンゴなどを目ざとく選んで拾い上げ、みんなで食べるのが楽しみの1つであった。

茄子の馬も流したが、川下では流れてきた茄子を拾ってきて、それを半分に切り、その水をつければ、いぼが落ちるといってつけたものである。

流れてきたもののうち、お団子などは、「馬の御供」だといって、拾ってきて馬に食べさせた。お供え物を流してしまうと、直にお棚を片付けてしまうのであった。トンズルも全部流してしまった。

出してあったお位牌は仏壇へ戻した。

盆ゴザは来年はまた新しくするので、今年つかったものは日常の使用にまわした。

お昼の食事は普通。

農作業は休み、16日はおせえにちといい、「地獄の蓋も開く」という日で、誰でもみんな休んだ。午後、女衆は夜の御馳走作り。13日と同じような煮物を作ったりして仏壇に上げ、みんなでお参りをしてから夕食を済ませ、それから送り盆にお墓へ行った。

仏様には最後の夕食をみんなと一緒にして、腹ごしらえをしてもらってから送り出すという趣であった。

(今は夕御飯を仏様に上げて、そのままお墓へ行って、帰ってきてからゆっくり家族が夕食を食べるという風になっているが、それはノテのやり方だと老人達は言う。仏様本位ではなく、自分本位になってきたことを言っているのである。ノテとは能無しとものぐさを一緒にしたような意味である)

お墓参りには門口で白樺の皮に火をつけ、送り火を焚いて、一同打揃い、弓張提灯に灯を入れ、これを先導としてお墓に行き、石塔ごとに練香と白樺の皮に火をつけたものを上げ、おひねりの米や、お供物や花を上げてお参りをするのであった。唱えるのは「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」であった。その他のことは言わなかった。帰りはまた提灯をつけて帰ってきて、家の門口に用意しておいた舟を川端に持ち出し、提灯から灯を移して舟の帆の白樺に火をつけ、それを川に流すのであった。

そのとき唱える言葉は「来年ござれ、来年ござれ」であった。

闇の中の川水は黒く、チロチロ燃える灯を映して流れていく舟を、子供達は見送りながら、夏草の茂る土手の道を、灯が見えなくなるまで追っていくのであった。

〈注 : 「昔はマテ(丁寧)だった」

「今は流させねえだで、川が汚れるせって」

「1年にいっぺんぐらいいだにねえ」

と老人達は言う。いつ頃からやらなくなったかという、つい最近、自然保護とか公害とかいう言葉が出てきた昭和40年代後半ぐらいからで、まだどのくらいかは流すものもいる。しかし消滅の過渡期にあると見てよかろう。

今は松本の新橋、奈良井川、大町の木崎湖あたりで客寄せに燈籠流しなどというのをやっており、及木あたりからも見物に行くものがある。諸事コマースリズムに流されていくようである。〉

新盆の家では、お墓参りの折に、親戚から貰った盆提灯(岐阜提灯)を1つ、木の枝か何かにつけて持っていき、それを墓地に挿したまま、あるいは木の枝に縛り付けて、灯をともして置いてくるのであった。

精霊流し(とはいわなかったが)が終わってからみんな盆踊りに行った。最後の踊りで、名残を惜しむように一段と賑やかであった。

〔精霊流しの再現〕

(発議)

うら盆行事のしめくりになる精霊流しは昭和40年代中頃に中止されてしまうが、その光景は今も老人達の脛の裏にやきついていて、再現の話が出たときには全員賛成し、賛成した後で小さなよめきが起きた。

(準備)

祖先の霊をのせて“あの世”へおかえしするための“お舟”を作らなければならなかった。それには材料の麦稈を用意する必要がある。

昭和30年代初期に日本の麦作はほとんど姿を消す。アメリカからの余剰小麦の流入に押されて、経済的になり立たなくなってしまったからである。

昭和45年(1970)、水稻の作付け制限(いわゆる減反政策)が始まり、空いた水田に転作作物が模索され、やがてコンバインの登場とともに小麦が大量に作られるようになる。しかし、コンバインによって刈りとり、脱穀が同時に行われてしまうので、麦稈は粉碎され、長いままの麦稈が入手しがたくなっていた。よって、精霊流しというささやかな行事を再現するにしても、その舟を作るための麦稈の調達から始めなければならなかった。

また、帆にする白樺の樹皮が問題になった。奥山に行けば白樺の樹がないわけではなかったが、自然保護、山林保護の建前から樹皮の採取は表むきできなくなっていた。しかし8月になると例年スーパーなどで白樺の樹皮が売られるようになっていたし、特に今年(2003)の特徴として、外国産の、褐色がかかった厚い樺の樹皮が大量に売られていたので、これを使用することにした。(これは迎え火、送り火に門口や墓地で火をたく行事だけが残っていて、田舎、都会を問わず、どこの家でもまだ行われていたからである。それにしてもスーパーなどで山積みされた樺の樹皮は、日本の商社が外国でやっているすざましい商魂を見る思いであった。)

(舟の作成)

本来なら8月15日か、16日の午前中に各家の当主が舟を作り、門口に置いておいたものだったが、今回は8月9日、老人クラブの男性会員達が公民館に集まり、3~40年前の記憶をたどって、思いおもいのデザインで舟を作った。

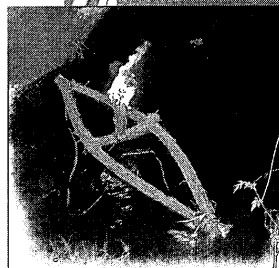
作った20組ほどの舟は、公民館長の許可をうけて、館の一隅に当日まで保管された。



舟づくり



舟を川に流す



灯のついた舟

（広 報）

大勢の子供達に集まってもらうためにPTAや育成会に協力を頼んだが、公的機関は行事日程が決まってい思うにまかせなかったの、集落の連絡網（連絡員という制度がある）を使って知らせてもらった。来年は公的に、という声があった。

子供達が来てくれるかどうか、あやぶむ場面もあったが、当日、時間になると彼等は続々とやってきた。大きな子供は仲間づれで、小さな子供は親達に連れられて、田圃なかの道は賑やかになり、クラブ員達はホッとした。間もなく送られる側になるはずの老人達だけでやって、送る側になるはずの子供達が来なかったら、それは画にもならないからである。

（当日の進行）

今回は、水路改修がすすみ、三面張りのコンクリート水路になっていて、どこでもというわけにはいかず、比較的川中が広く、水量も多く、かつ流れがゆるやかな場所を選び、いささかショー的ではあるが集団でやることになった。

トラックで舟を現地へ運ぶもの、白樺の帆に火をつけるもの、舟を水面に落とすもの、下流で舟を引き揚げるもの、そしてまた残骸をトラックに積んで運び去るもの、（後日それを処分した人もいたであろう）実に見事な共同作業であった。

（印 象）

一面の田圃は闇の底に沈んでいた。川面は更に暗い。白樺の帆がチロチロ燃えて、水面に灯の影をうつし、静かに流れて行く。

子供達がそれを追っていく。

昔だったら（ということは、今やっている老人達の幼い頃は）、夏草の茂る畦道を、

「来年ござれ、来年ござれ」

などと言いながら、灯が消えるまで追って行ったものだが、今は「ワーイー、ワーイー」と言いながら、コンクリート舗装の道をついて行くだけだった。

『昔はなんでこんなことをしたのか』

『今またなんでこんなことをするのか』

子供達に話してくれた親達はいたであろうか？

それにしても、お盆の行事は、68年前の昭和10年にも、48年前の昭和30年にも、また現在平成15年にも、精霊流しを除けばほぼ同じように行われているという。家の存続とか、命の連続性というようなことを、自分達も実感し、子や孫達にも実感させるに最適な行事と考えるが故に続けてきているものと思われる。

（反 省）

もし来年もこの行事をやるとしたら（そうしたいものだが）、子供達にも最初から参加してもらい、老人達の口からお盆の行事について語ってもらったら、と思った。

“お月見” 行事の再現

現在、ことさらにお月見などをやる家はほとんどない。宵のうちに昇ってくる9月の満月を『ああ、今日は満月だ』、と言ってことさらに仰ぐ人さえも、老人達を除けば稀であろう。テレビで放映される満月をみて、“お月見”という言葉ぐらひは知っているのだが。

昭和10年（1935）にはどこの家でもやっていた月見は、敗戦、戦後の混乱期を経た昭和30年（1955）にもまだほとんどそのまま行われていた。その状況は『老人達のおきみやげ』には次のように記録されている。

（これは昭和10年の記録だが、昭和30年にも省略されずに行われていた）

〔9月12日〕 220日、15夜（旧暦9月15日）

気の早い人は、イネがころんでしまえば困るなどといって、こびえ抜き（稗抜き）を始めた。朝食、昼食は変わりなし。夕方になって餅を搗き、お月様に供え、夕方には餅を食べた。

お月見

旧暦9月15日は夕方になって餅を搗いた。直径5寸位なお飾り（鏡餅）を2つ作って、四角な斗栱の底にサン俵をおき、その上に餅を並べておき、南側の月のよく見える屋根の上に供えた。鶏小屋の屋根辺りが多かった。縁側に供えたものもあるが屋根の上が本流である。

そのとき、枝豆を枝についたまま洗って、2本、餅に添えて斗栱の中に供えるのが慣わしであった。

ススキの穂や団子を上げる習慣はなかった。

この夜の御馳走は、お飾りをとった後の餅をキナコ餅にしたり、アンコロ餅にしたり、またお雑煮にしたりして食べたものである。

子供達は、お月見のときとは限らないが、遊戯の時など、

オーツキサマ イクツ

ジュユウサンナーナツ

マーダトシャワカイ

ワーカイボコウンデ

アブラカイニヤッタラバ

アブラヤノニーワデ

スベツテコーロンデ

アーカイオベ（ベベ）ヨーゴシテ

アーライヤデアーラツテ

ホーシャデホシテ

タータミヤデタータンデ

シーマイヤデシーマツタ

というような歌を歌ったが、お月様を見ると自然にこの歌の最初の部分、「お月様いくつ、十三七ツ」という部分が口ずさまれてくるようであった。

昔は夜遅くまで外で働いた。お腹が空いたり、眠くなったりで、子供がむずかると、母親はよく子供を背負って働いたものだが、背負われると顔が上に向くので、月がよく見えたものである。母親は働きながらだから、上手にはいえないが、必ずお月様の歌などを歌ってくれたもので、自分が年をとって70歳、80歳になった今でも、月見の話になると自然に幼い頃の情景が思い出される風であった。

秋のお月見というのは3回あった。

十五夜（旧暦8月15日即ち新暦9月12日）

十三夜（旧暦9月13日即ち新暦10月10日）

十日夜（旧暦10月10日即ち新暦11月5日）

何れも夕方に餅を搗いて前述のようにお月様に上げたが、お飾りに添えるのは十五夜が枝豆2枝、十三夜はなくて、十日夜は大根2本と決まっていた。

娘が嫁にいった年は、娘の夫を、「お月見に来ておくれ」といって招待したものである。新夫婦は揃って呼ばれてきた。稲刈りの最中で忙しかったが、娘可愛さに省略はせず、酒肴を出してもてなした。娘夫婦は泊まらずに、その夜のうちに帰ったが、時によると娘を置いて、夫だけ帰ることもあった。夫の家もまた稲刈りで忙しかったのである。

これは新婚の年だけであった。また月見は3回あるのだが十五夜か十三夜に呼んで、十日夜はカカシ上げといわれ、この日呼ぶとカカシムコ（役立たずのムコ）になると言われた。

〔“お月見行事”再現の経緯〕

今回、第二次記録運動を始めて19回目の平成15年（2003）10月、〔お月見〕のところにさしかかったとき、誰からともなく、お月見行事をやってみよう、という話が出て、全員賛成のもとに実行することになった。

思うに、前回やった“精霊流し”再現の、心の弾みが下敷きになっていたのであろう。

時はすでに9月の満月を過ぎ、次は10月8日の『十三夜の月』ということになるのだが、ここでは9月の満月の行事を再現しよう、ということになった。

（現在、十五夜、十三夜、十日夜^{トウカンヤ}などという区別を知っている人はほとんどいなくなってしまった）

〔再現の経過〕

実際にやるとなると、一番問題なのは餅搗きであった。餅搗きは稲作地帯であるだけに現在も、日常的にどこの家でもやっているのだが、今はほとんど電動式の自動餅搗き機でやっているのだった。

〔実施の手順と状況〕

- (1) 第一に、ほとんど失われてしまった木の臼と杵を探さなければならなかった。これはさすがに大切に保存していた人があった（老人クラブ会長・高山和夫氏・73歳）。
- (2) かまどを見つけ出し、設置場所を選定しなければならなかった。（公民館の庭の一隅を借りた）
- (3) せっかくだから新米を使いたいということになり、稲刈りをしたばかりの糯（もちごめ）をわざわざ精白しなければならなかった。
- (4) 分量をどのくらいにするか、3升炊き2回にするか、5升炊き1回にするか、経験を語り合い、5升炊き一臼にすることに決めた。集まる人数の予想や、一人どのくらい食べるか、など、実際に行事をやったことのある人でなければできないことであった。
- (5) 前日の夕方から糯をとぎ、1晩浸漬しておく労を引き受けてくれる人がいた。
- (6) 2日後に秋祭りがあり、公民館がその準備のために使われているので、その一部や調理室を老人達の試みのために空けてもらわなければならなかった。老人クラブは弱小なりといえども、（公・おおやけ）のものであるから、会長がかけ合って場所を割愛してもらうことができた。
- (7) 大釜とせいろを使って5升（7.5k）の糯を炊き上げる火加減や時間はさすがに経験者ぞろいであって、戸惑うことはなかった。



餅搗き



お月様にお供え

(8) 一と臼5升というのは大白で、めったにやらないことだったが、女性達はその加減を心得ていて、戸惑うことはなかった。

(9) 新米でやるとなればあんこは新小豆ということになり、新小豆が調達され、たちまち粒餡が作られた。

(10) 餅搗きは搗く人と、手返しをする人の呼吸が合わないと大事故になるが、会長が杵を振り、夫人が手返しをするという構図が、何の戸惑いもなく出来上がった。

5升臼は大変な労働である。杵は最大級のものであり、重くて、腰がすわらなければ扱えない。また手返しも5升臼となると素人では手が出ない。会長夫妻の熟練度をまざまざと見る思いであった。たまたま居合わせた若者が挑戦してみたが、腰が入らず、フラフラして、すぐに止めてしまった。

(11) 搗き上げる、運ぶ、千切る、あんこをつける、盛り合わせる、これは女性達の仕事だが、大勢集まって何かをする、という農村の行事に習熟した人々の見事な連携作業を見る思いであった。(これは若い女性達にも経験させておきたいことであった)

(12) 餅の大きさ、あんこの砂糖と塩の加減、練り具合など、若い人が大勢でやると意見が多く、皆の意見を入れるとたいはいはいい加減になり、中途半端で、うまいものはできないのが常である。

ところが、ここでは誰が宰領していたのか、ついぞ判らなかったが、実に見事な型と味になっていた。共同作業に慣れた人達の“技”という他はなかった。

(13) 出来上がり、月に供え、1つ頂いてみて驚いた。新米の糯、新小豆、大白で手搗きの餅、大勢集ってお月見という雰囲気、どれをとってみてもうまくないはずはないのだが、私の経験してきた常識的なうまさではなかった。全国には有名な餅がある。伊勢にも、駿河にも、甲斐にも名高い名物餅があるし、長野県下にも専門の餅屋があって、それぞれにうまいのだが、この夜の餅をたとえるなら、いやたとえることはできない。百点満点の採点法でいうと、前者を100点とするなら、この夜の餅は120点はやりたくなるような餅であった。

私を含めて、人はみなまずいものを食っているんだなあ、と思った。

「本物は金になる」、とも思った。

(14) 女性達があんこ餅を作っている間に、男性達は縁台作りや、お供え物の用意（お餅を供える斗楯の用意、枝豆、ススキの用意など）を手分けでやっていた。

古い斗楯（角型、15立入れ）を裏返し、その上に、昔はサンダワラだったが、今はこれがないために、新ワラを曲げて輪を作り、その上に搗き立ての餅を両手で千切り、ソフトボール大のものを2個、並べて置いてお供え餅の体裁を整える。枝豆をそえる。

昔はこれを南面の屋根に置いてお月様に供えたものだが、老人達にとってそれは危険なため、今回は縁台の上に並べて、公民館の南面きの庭に飾った。

(15) 雲にかくれていた月が、午後7時ごろになって、ようやく顔を出し、皆歓声をあげて仰ぎ見た。

子供達が三三五五に集まってきて、おばあさん達からお餅をもらい、歓びの声をあげた。子供達は月よりお餅で、「ほらお月様だよ」などと言われて月を仰ぐ、というふうであった。

老人達にとって、子供達が集まってきてくれたことが一番嬉しく、労を忘れて喜び合っていた。

(16) 後片付けは手ぎわよく行われた。臼、杵はきれいに洗われ、軽トラックに積んで運び去られた。ここでも指揮者がいるとはみえないのに、見事な共同作業がみられたのは感動的であった。

(17) このささやかな行事に、SBCテレビ、信濃毎日新聞社、タウン情報紙、市民タイムス、アルプス安曇野国定公園民俗資料調査班などが集まった。お月見の行事が行われなくなった証拠であろう。

(18) お月見の後のお祝い行事がまた楽しいもので、報道陣も加わり、盛大に行われた。



夕食に餅を皆で食べる

〔筆者の所感〕

(1) 餅のうまさ

コミュニティビジネスの観点から考えても良いのではないか、と思うほどであった。

(2) タイミングよく月が顔を出したときの会衆の喜び、特に子供達が集まってきて、甲高い声がひびいたときの老人達の喜び。

(3) 行事進行の協力、共同作業の見事さ。

(4) 学習の喜び、企ての喜び、協力の喜び、実践の喜び、成就の喜びなどなど、これはささやかな試みではあるが、筆者が作った『むらまちづくり曼陀羅』(図参照)にぴったりあてはまるものであった。

